

Pickup!① たくさんの思い出をありがとう

3月6日、明治6年に阿連地区の延命寺で「阿連学校」として授業を開始されてから142年、佐須村立尋常小学校阿連分校として創立依頼120年という歴史を持った、対馬市立阿連小学校で閉校式が行われました。全校児童は10名で、今年度2名が最後の卒業生として阿連小学校を卒業します。第一部のお別れ集会では、児童達による阿連小学校の思い出を演劇にして発表。第二部の閉校記念式典では、児童代表の山崎亮汰くんが学校旗を市長に返納、式の最後には出席者全員で校歌を合唱し阿連小学校の歴史に幕を閉じました。

阿連小学校の児童は、4月から金田小学校へ登校します。



8年間走りに走りました

3月25日、2期8年間の対馬市長としての職を辞する財部前市長の退任式が、市役所別館大会議室で行われました。職員からのフォトムービーが放映された後、財部前市長から職員へ激励の言葉が送られました。市役所正面玄関では花束を手渡された前市長が涙ながらに「ありがとう」と職員に挨拶をかわし市役所を後にしました。



Pickup!②

Pickup!③ 知恵と汗を出しながら



3月28日、市役所正面玄関前に市長となって初登庁した比田勝新市長へ、職員から花束が手渡され、多くの職員が初登庁を歓迎しました。その後、職員へ比田勝新市長から訓示が述べられ、比田勝新市政のスタートを切りました。

比田勝市政 発進！



任期満了に伴う対馬市長選挙において、無所属新人で元副市長の比田勝尚喜さんが当選し、3月28日に初登庁しました。

人口減少時代を迎え、過疎高齢化・少子化・農林水産業の振興・交流人口の拡大など多くの課題を次世代への夢や期待に変えるべく、対馬のかじ取り役を任された比田勝新市長にこれからの対馬についてインタビューしました。

市長選への 決断

財部市長の3期目への不出馬を受けて、これまでに築き上げてこられた政策を停滞させるわけにはいかない。特に（仮称）国境離島新法の成立を目前に控えて、期成会や市議会と共に一丸となつて対馬市の活性化に向けて国や県に働きかける重要な時期だと考えました。新法が成立した後も他の離島に後れを取らないように中央とのパイプを最大限に活用しながら、継続を力にして、見直すべきところは果敢に修正する「守・破・離」の手法で市民の皆様が「対馬に生まれて良かった。対馬に住んで良かった」と想える豊かな島づくりを目指していきたくと決心しました。

しゅーはーり【守破離】
剣道や茶道などで、修業における段階を示したものだ。

「守」は、師や流派の教え、型、技を忠実に守り、確実に身につける段階。
「破」は、他の師や流派の教えについても考え、良いものを取り入れ、心技を発展させる段階。

「離」は、一つの流派から離れ、独自の新しいものを生み出し確立させる段階。



選挙戦を振り返り 感じたこと

対馬全島を歩きながらあらためて、空き家と独居老人世帯の多さに驚きました。これは、基幹産業である農林水産業の衰退と雇用の場の減少が大きな原因であるのではと考えています。中でも高齢者の皆様からは、病院等への通院における路線バスの改善や交通網の充実を強く要望されました。また、市民の皆様は、今後とも住み慣れた対馬で生活されていくことを強く望んでいると感じました。「地域包括ケアシステム」の早期構築を目指しながら、健康増進や福祉

施策の充実を図り、併せて、産業の活性化や交流人口の拡大を図っていきます。

公約 「豊かなしまづくり 5つの拡大戦略」の 具体的な政策

①交流人口の拡大

対馬は、農林水産業の活性化なくして地域振興を図ることはできません。また、農林水産業に元気がなくては交流人口の拡大も望めません。農林水産業と観光産業の融合を図り、体験観光等の受け入れを充実したいと考えています。これまでの見せる観光に、対馬の豊かな食材を食べる楽しみを乗じた「観光の掛け算」を構築するために、対馬の特産品や食材の安定供給のための「特産品配送センター」を整備します。

懸案であった宿泊施設不足についても、厳原地区や上対馬地区で建設計画が具体化してきていますが、20万人を超える韓国人観光客とともに、国内観光客をもっと持続的に呼び込むためには、新たな観光資源の開発が急務だと考えています。そこで御

嶽や白嶽の深山幽谷な自然のなかで、東側にも西側にも海峡が見渡せるような縦走路を整備したいと考えています。

また、玄海つつじの植栽を進めてきたあそうベイパークは、今後、観光客呼び込める「つつじ公園」として整備充実して参ります。

②産業・所得の拡大

はじめに着手すべきは「ふるさと納税制度」の有効活用です。対馬の特産品の生産高と販売額を引き上げるため、さらに、特産品の加工における雇用の場を拡大させるため、返



初登庁で職員に訓示する比田勝市長



礼品の拡充を直ちに進めます。加えて、交流人口の拡大を図る観点から多額のご寄附をいただいた方には、対馬市準市民の認定書を交付し、優待券を発行しながら対馬へ呼び込むことで、島内での消費拡大に繋がっていきます。

農林水産物については、「対馬しいたけ」をはじめ、魚介類では、「アナゴ」や「アカムツ」、「アマダイ」等のブランド品が数多くあり、特定の市場では高値で取引されています。さらに、それ以外の産物も含め、従来の第一次産業の枠を超えて6次

産業化を推進することで、付加価値を付け、生産者の所得向上につなげてまいります。また、これらの製造過程で必要となる施設整備については、補助事業で支援して参ります。

③人づくり・教育の拡大

全国で5番目を推移している出生率（2.18）を更に伸ばし、人口減少に歯止めをかけるためには、出逢いの場の提供が必須であるため、関係機関と連携しながら積極的に進めます。また、子育て世代の経済的負担軽減のため、保育所及び幼稚園料金の3人目以降の無料化など、利用料金の低廉化に向けた取り組みのほか、子ども医療費については、現在の未就学時までの助成を中学生にまで拡大します。

心豊かな「対馬っ子」を育む教育では、対馬の文化や歴史、自然に関する総合学習等を充実させることで、故郷を愛する心豊かな「対馬っ子」を育みます。また、各地域で継承されている郷土芸能等の伝統文化を小中学生に継承させるための支援策を積極的に実施していきます。「子ども夢づくり基金」を活用したスポーツ、文化交流支援にも積極的に関わ

り、強い体と心を持った「対馬っ子」を育みます。

④健康・福祉の拡大

対馬いづはら病院跡地の直営診療所につきましては、6月の開設に向けて準備を進めているところです。併せて、特別養護老人ホーム（50床＋ショートステイ40床）も平成29年度の早い時期に開所予定であり、福祉・医療体制の充実に努めます。

また、対馬いづはら病院跡地は、総合福祉・健康増進施設の拠点として位置づけ、現在の足湯の温泉源（漁火の湯）を活用した温浴施設と簡易な運動施設の整備による健康増進を図り、年々高騰する医療費や介護費等を抑制したいと考えます。

高齢者の方は、家族による介護をはじめ在宅サービス等を利用して、できる限り住み慣れた自宅や地域の介護施設に入所したいと考えておられることから、先に述べましたように「地域包括ケアシステム」の早期構築が必要と考えています。また、要介護者とならないための予防に対する取り組みとして、高齢者の交流の場の確保や健康体操の推進、検診受診率の向上に取り組みます。

⑤快適生活環境の拡大

「対馬市長期人口ビジョン」で示した目指すべき将来の方向性を踏まえ、市民の皆様が対馬に住み続けるために必要なサポートとして交通網の充実に必要と認められました。各地域の幹線道路の整備拡充や病院等に通院する路線バスの充実が喫緊の課題であるため、国や県にも強く要望しながら、幹線道路の整備拡充に努め、コミュニティバス等の充実を図ります。また、北部地域の強い念願であるJR九州高速船への混乗の実現についても、引き続き関係機関の協力を得ながら、早い時期に実現できるよう積極的に取り組みます。



財部前市長が唱えてきた 協働のまちづくりの継承

地域マネジャーや集落支援員等の協力と、各地域の皆様方の自分たちのまちを自分たちの力で豊かにしていきたいとの熱い思いが実を結び、現在64地区が、地域づくり計画を策定しています。また、地域づくり宣言については、181行政区の半数を超える98地区が、各地区の将来像を掲げ実現に向けての活動を開始されています。市民の皆様の熱い思いを後押しするのが行政の役割と考えていますが今後も市民と議会、行政が知恵と汗を流しながらスクラムを組んでまいりたいと思います。

また、早期の成立が予想される（仮称）国境離島新法により、航空運賃や航路運賃の低廉化が可能になるため、国内観光客が増えることで交流人口のさらなる拡大が期待されます。島おこし協働隊や域学連携事業による大学、学生の視点や感覚を最大限に活用した島づくりを今後とも目指します。

座右の銘

小学生の時の恩師から贈られた「為せば成る、為さねば成らぬ何事も・・・」江戸時代中期の米沢藩主・上杉鷹山の名言ですが「やろうと思えば何でもできます。できないのはやろうと思わないからです。」を心の中に秘めておくことで、いつの間にか座右の銘となっておりました。最近、分かったことですがケネディ元アメリカ大統領も上杉鷹山公を政治家として尊敬していたそうです。江戸時代中期に人口減少対策として、現在の子供手当のような施策や農村への土着を奨励した施策は、領地返上寸前の藩財政の立て直しも含めて、今の時代にも通じる政治手腕の持ち主ではないでしょうか。政策的にも見習いたいと思います。

10年後の対馬

10年後の対馬をイメージしますと、対馬市総合戦略の施策展開により、人口減少のスピードも減速し、

待望の国境離島新法の成立後、航路・航空運賃の低廉化が実現。交流人口の拡大に伴う生活及び観光基盤の整備も進み、島内には、国内外からの旅行客が溢れ、子どもから高齢者まで市民の元気な声が響く「自然と歴史と活力に溢れた国境の島」と10年後の対馬をイメージしています。

については、対馬デカラを結集し、「一億総活躍社会」ならぬ「市民総活躍の島」を目指し、その実現に邁進する所存でありますので、市民の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

プロフィール

- 昭和29年9月15生まれ（61歳）上対馬町大增出身
- 西日本短期大学卒
- 昭和52年上対馬町役場入庁
平成17年4月から対馬市役所本庁勤務
農林水産部長を経て平成25年8月に対馬市副市長に就任
- 小学校から続けている剣道は教士7段
- 厳原町で妻と長男との3人暮らし
- 趣味は旅行。学生時代には北海道を一周。
信州・沖縄・与論島などを巡った。

